

# 【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

## 平城宮跡出土組み合わせ文字の水脈をたどる

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 吳 修詰

【キーワード】 墨書土器、長沙窯、組み合わせ文字、まじない、文字遊戯

### 【目次】

一 文字遊戯の水脈

二 呪符説の再考

「離別のまもり」と「離別祭文」

「離別守」「離別法」「男女縁切の呪

「念」は反語ではない

三 文字遊戯のシルクロード

長沙窯製品：離れがたい「念」

〔附表〕長沙窯製品題詩およびテーマ分類

幡垂飾形遊戯詩と仏教詩稿断片

四 推論と仮説

【論文要旨】 本論文は、平城宮跡から出土した「我・念・君」「道・金・為」の組み合わせ文字が墨書された土師器を中心に、参考資料を提示しながら、まじない書・長沙窯製品に見られる類例を整理し、ほぼ定説化された藤澤説の再考を通して、この2組の組み合わせ文字にまつわる謎を解くことを試みるものである。まず、『呪詛調法記』など民間信仰資料の性格を分析することで、「我・念・君」の組み合わせ文字は日本近世期に男女の離別を目的とした呪符に使用されていたが、符の象徴性を構成する要素の一つにすぎず、「我・念・君」自体が反語的な意味を持ち、呪術性のある文字遣いと判断するには問題があると指摘した。つぎに、唐末五代に盛んに流通した長沙窯製品の商品性から、長沙窯水注に焼き付けられている「我・念・君」の組み合わせ文字は遊戯的・装飾的な役割を持つものとみたほうが妥当であると論じた。さらに、長沙窯製品に見られる文字遊戯の類例と敦煌文献の関係性に触れ、仏教文学がそのような文字遊戯を生み出す沃土であり、それらを漢字文化圏の隅々に運び、開花させた水脈でもであると示唆した。最後に、平城宮跡出土墨書土器に書かれた痕跡および近くで発見された木簡の削屑から、2組の組み合わせ文字は使用済みの土器を使った落書・習書である可能性にもとづき、「道・金・為」は中国伝来の「我・念・君」に倣って応用的に作られたという仮説を立てた。

### 一 文字遊戯の水脈

七世紀後半からの日本における日常的な書記様態は、次々と発掘された出土遺物によってあきらかになりつつある。たとえば、木簡に見られる習書や落書きの痕跡は、下級役人の手習いなど、古代日本人が漢字文化を吸収していた実態だけでなく、和語と漢文の落差による一種の奇妙な化学反応をも表して

いる。日本では、極めて早い段階から、漢字が単に音声言語を書き表す二次的な記号としてではなく、遊戯的・芸術的表現を可能にする道具として認識されてきたといえよう。それらの出土遺物は、漢字文化の渡来から日本的に展開していくまでの変化を如実に示している。漢字の形による視覚的な普遍性と音声言語である和語がいかにか（戯れ）ていたか、という文化史的表象を俯瞰するための貴重な研究材料でもある。

木簡に関しては、管見の限り、字謎・字訓歌など狭義的な〈文字遊戯〉とみなされるものはまだ発見されていないようであるが、遊戯的表現が誕生するきっかけになりうる様態は確認できている。たとえば、同じ部首がつく文字が記されている習書木簡が平城宮跡から発見された（図1）。万葉集においては、「百濟野乃芽古枝爾待春跡居之鸞鳴爾鷄鷓鴣」（万葉集巻八・1431）のように、同偏旁漢字を〈戯書〉として使用し、視覚的な趣を加える例が散見する。当然、中国にもそのような類例が多い。たとえば、敦煌文献 S.5513『開蒙要訓摘抄』の紙背に、「毛」「讠」「木」「禾」「彳」を偏旁とした文字が整然とつらなり、内容および筆跡からして学童の習書と思われる。そのうち、「讠（之繞）」がつく部分の後ろから二行分20文字は、遊戯詩として唐末から五代にかけて製造・流通した長沙窯製品にも書かれている<sup>1)</sup>。以上の事例が様相を呈しているように、同種の文字を使う共通的な経験は、漢字文化の伝承がどのような姿でおこなわれるのを理解するために有益な示唆を与えてくれる。出土文字資料は、文化的水脈の類推、もしくは日中漢字文化の実相を比較する基礎材料となる重要な意味をもつ。



図1 1 平城宮 4-4688 積文：謹論語諫[讠言牛]計課訓謂諷諷 青青秦秦秦謹謹申  
2 平城宮 6-10015 積文：蘄蘄[艹羊]蒜菹葱

陶磁器や石造物に見られる漢字の多くには、装飾的な性格が鮮明に現れている。そのうち、組み合わせ文字は、甲骨文字から陶器等の款識まで、特に器物の表面によく使われる「伝統的」な書記形式である。日本の墨書土器に記される組み合わせ文字はしばしば字面を省略し、上の文字の一面を下の文字が

共有してしまう例が多い。その中には、漢字の種類・書体のいずれをとってみても通常の漢字に該当しないような文字、おそらく則天文字や道教の呪符の影響を受けたものがある。それらが日本人に強烈な印象を与え、一種の吉祥または呪術的な意味を含めた特殊な字形として使用されるようになったのではないかと推測される<sup>[2]</sup>。

本論文の研究対象である「墨書土器に記されている組み合わせ文字」も、字義によるレトリックというより、字形を利用した視覚的な技芸と捉えられよう。筆者は、「なぶんけんブログ・コラム作寶樓」に掲載している『我念君、君念我』の組み合わせ墨書文字<sup>[3]</sup>という記事から本論文の着想に至った。詳細については以下各節に述べるが、まず、当該資料の基本情報、上記のコラム記事に挙げられた疑問点および手がかりを整理したい。

この墨書土器(図2)は、1963年夏から秋にかけて行った平城宮跡第13次調査において、内裏北外郭地域の土坑(SK820)から天平末年(749)頃に投棄された一括遺物として出土した。底部内面中央に「坏」の墨書があり、底部外面にも二種の墨書がある。底部外面墨書のうち、「莫採・鸚鵡鳥坏」のほうは二行に分けて同筆で書かれており、色がやや薄く、意味は「オウムのエサ入れの坏、採ることなかれ」と読み取れる。「我・念・君」「道・金・為」の二組の組み合わせ文字は別筆で逆方向から鮮明に記されている。発掘調査報告書では、その読み方が「君我を念い、我君を念う」「道を為すは金なり、金をなすは道なり」と推測され、「近世では前者を夫婦の離別に関わる呪符として用いた事実がある」と藤澤一夫の論文が言及されている<sup>[4]</sup>。



図2 平城宮跡第13次調査出土墨書土器(『平城宮出土墨書土器集成I』26)

この二組の組み合わせ文字に対し、巽淳一郎は、コラム記事において以下の疑問点を挙げた。

- ①「我・念・君」の字義は、相思相愛の意を表す文字遊びなのか、呪術的な符号なのか
- ②組み合わせ文字は平城宮役人の独自の創意なのか、それとも漢字文化の原点である中国に起源を有するか
- ③中国では、この組み合わせ文字がどこまで遡れるのか
- ④「道・金・為」の字義が何か

さらに、二点目に関しては、中国唐代の長沙窯では詩文や文字遊びの類が文様代わりに水注などの製品に焼き付けられ、その中に「我・念・君」と同じ形の組み合わせ文字があった、という重要な手がかりを提供した。また、長沙窯の水注は九世紀中頃の製品であり、平城宮出土の組み合わせ文字資料のほうが古く、両者の間には百年以上の年代差があることをも指摘した。本論文では、この手がかりを追いながら、以上の各問題点に関する現段階の調査結果を整理し、筆者なりに仮説を立てたい。

## 二 呪符説の再考

当該墨書土器の発掘調査報告書に言及されている藤澤一夫の論文は、1968年に『帝塚山考古学』第一号に掲載した「古代の呪咀とその遺物」である。論文の中にも引用されているが、「我・念・君」について、国文学者による「土器の底に戯れ書きされたこの判じ文は、意外に深刻な男女の恋を、背景にもっているのかもしれない」というロマンティックな解説が施してあった<sup>5)</sup>。ここに注意すべきなのは、「判じ文」という表現である。「判じ文」は、判じ絵と同じく「判じ物」に属し、文字や絵画に隠された意味を当てる謎解き的一种として捉えられている。しかし、これを呪術的なものと感得した藤澤は、『呪詛調法記』という近世のまじない書に当たり、みごとに109番目の「離別のまもり」に同じ組み合わせ文字を発見した(図3)。藤澤はこれにもとづき、「我・念・君」は「相愛を祈る呪符ではなくて、『君も思はじ、我も思はじ』という言外の否定がなされている」と論じた。

その後、「我・念・君」のほうはいくつかの先行研究に触れられているが、いまだに詳しい分析がなされておらず、「離別に関わる呪符である」という藤澤の説がほぼ通説のように扱われてきた<sup>6)</sup>。巽は前述のコラム記事において、「近世には反語の意義で夫婦離別の祭文に使われていた」と藤澤の発見を紹介したが、当該墨書土器との関係については疑問を発している。2014年に国立歴史民俗博物館でおこなわれた国際企画展示「文字がつなぐ：古代の日本列島と朝鮮半島」の図録では、「我・念・君」の組み合わせ文字について、「<sup>まじない</sup>離別の呪いであるとされている」との情報とともに、「一方、九世紀中頃の長沙窯の水注にこの文字が記された事例が紹介されており、別の意味である可能性も考えられる」と説明している<sup>7)</sup>。また、漢字の組み合わせによる呪符に関しては、笹原宏之「会意によらない一つの国字の消長」にも検討がなされ、「我・念・君」の事例について、上代のものと近世のものに見られる形態上の一致が「はたしてこれは衝突なのか一つの系譜上にあるものなのか」とさらなる検討の必要性が言及されている<sup>8)</sup>。要するに、中国唐宋五代の長沙窯製品に類例があるという事実が新しく紹介されたことよって、平城宮跡から出土した「我・念・君」の謎を解明するための別の視点が提供されたのである。

ブログ記事において巽が指摘したように、平城宮跡から出土した墨書土器と九世紀中頃の長沙窯の水注の間には百年以上の年代差があり、それを説明するための有力な資料が未だに見つからない。ところが、そのブログ記事より十ヵ月ほど遅れて、2008年の秋に、別の遺跡からも「我・念・君」「道・金・為」の組み合わせ文字が出土した。日本における二例目となる当該墨書土器は、九世紀後半のものと思われる<sup>9)</sup>。三例目の出土はまだ確認されていないが、この発見により、長沙窯製品が流通していた年代とはほぼ同時期に、「我・念・君」の組み合わせ文字が記された容器は日本に存在していた事実がわかった。

### 「離別のまもり」と「離別祭文」

長沙窯という手がかりに沿って進む前に、「離別の呪符」説の「証拠」と目されるまじない書をあらためて概観し、もう少し深追いしてみよう。



藤澤が発見した「夫婦の離別に関わる呪符」は『呪詛調法記』という書籍に載録されている。『呪詛調法記』には、京都書林米川／森岡貞久行によって元禄 12 年（1699）に刊行され、京都菊屋七郎兵衛が求板した後刷本がある。また、菊屋からは、『呪詛調法記』とその続編である『陰陽師調法記』（元禄 14 年＝1701）を一冊にまとめた『増補呪詛調法記大全』（安永 10 年＝1781）も刊行されている<sup>[10]</sup>。日本近世において大量に出版された「重宝記」（「調法記」「調方記」などとも書く）と題する一群の書籍は、中国における「万宝全書」の類と同じく、庶民生活に必要な日用知識を集めた実用書であり、いわば日用類書に該当する。しかし、中国の「万宝全書」のように幅広い分野の知識を包括し、かつ階層性の高い目次で整理分類されているものはほぼ見られず、主題別に一冊ごとに内容が振り分けられているのが特徴である。『呪詛調法記』はそのタイトルが示したとおり、「呪詛（まじない）」を専門的に扱った手引書である。ひらがなが漢字混じりの和文体からなっており、前書き・目次・挿絵が完備されている。全体的に統一したレイアウトを呈し、表記のゆれが少なく、通俗的でありながら細心に編集されている印象を与える。初版の『呪詛調法記』の序文に「此一冊予が家の秘書也といへども我一人の宝とせんはむびげなりと思ひ、梓にちりばめ、世の調法となす物也」と記されているように、近世商業出版における「秘術の公開」という時代の特徴を鮮明に現している<sup>[11]</sup>。ちなみに、後に『増補呪詛調法記大全』として刊行された際には、序文は大江匡弼による漢文に変更され、「この書、何者が撰したかは知らないが世に長く刊行されてきた。おそらく修験家の書であろう〔此書不識何人之撰已行于世尚矣蓋修験家の書〕」とある。

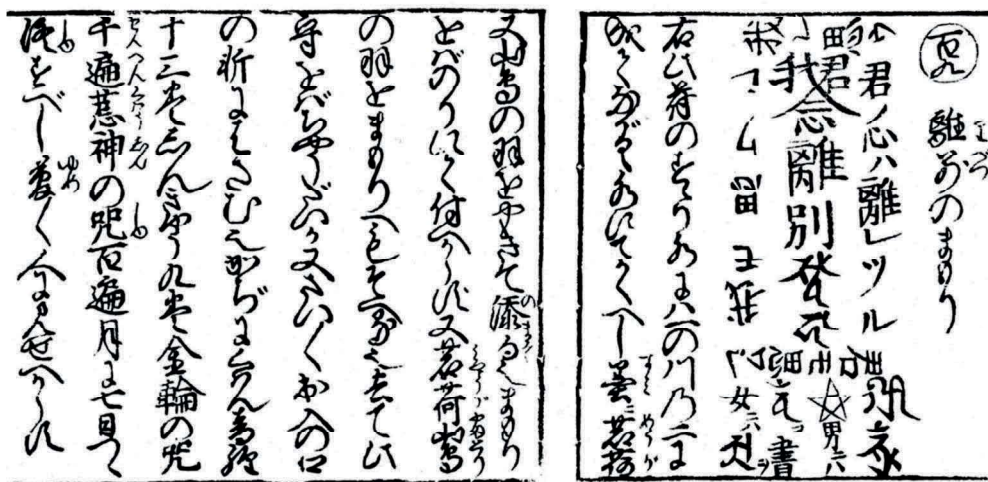


図3 『呪詛調法記』『増補呪詛調法記大全』に見られる「離別のまもり」（長友千代治編『重宝記資料集成 16 俗信・年暦』、京都：臨川書店、2006年3月、132-133頁。）

ところが藤澤の発見はそれだけではなかった。平城宮跡出土墨書土器との間にある千年ほどの隔たりをつなぐ材料として、元興寺極楽坊所蔵庶民信仰資料に見られる「離別祭文」（康暦 3 年＝1381）をも挙げた。「離別祭文」には、「我・念・君」の組み合わせ文字を含む呪符は使われておらず、祭文・呪具・呪法のみ記録となっているが、呪具に関しては「離別のまもり」と類似点がある。前者に犬蓼・山鳥

の尾が使われるのに対し、後者は茗荷・山鳥の羽が使われるという点において共通性があるため、両者は同系の呪術に属すると論じられた。さらに、『離別祭文』において、支度される品々の中に大小の土器があるのは、組み合わせ文字の呪符を書いて放ち去るためのものとなる」とされている<sup>[12]</sup>。繰り返しになるが、「離別祭文」のまじないにおいて呪符は使われない。故に、論拠となる基本的な条件が揃っておらず、推論としては飛躍しすぎた感がある。

「離別祭文」についてさらに詳しくみると、用意する呪具を除けば、「離別のまもり」とはむしろ相違点のほうが際立つ。まず、祭文自体の形式は純然たる漢文調であり、文言として四六駢麗の対句が多用されている。また、冒頭に「謹んで請じたてまつる」東・西・南・北・中央・上・下七方七色の「離別將軍」と称する主宰神は従来類例を見ないものであるが、「將軍」と名づけることは中国から将来された『宿曜経』の常例にちなんでいる。支度品として挙げられている道具の中に、神座七前、御幣にあたる幣絹・藉布各二丈七尺、紙三帖、三種のヒトカタ各二枚および神饌として供える米二石・季節の果物・わかめ・鰹・塩が含まれている。したがって、その後ろに続く「大小の土器、折櫃一合、筵・葎各三枚、桶・杓各一口その他」はやはり神饌を盛る容器と台座にあたと捉えるほうが自然である<sup>[13]</sup>。類似点と思われる呪具に関しては、犬蓼と山鳥の羽・尾の意味はまだ特定できないが、「離別のまもり」に使う茗荷には「食べると物忘れする」という俗信にかかわるため、原始的な類感呪術の原理ののつとるものと理解することができる<sup>[14]</sup>。いずれにしても、土器が「離別」を目的とした呪術に使われる道具に含まれているということだけで、ただちに奈良時代のあの墨書土器と関連づけるには根拠が不足している。

### 「離別守」「離別法」「男女縁切の呪」

さいわい、「我・念・君」の組み合わせ文字を使った「離別守・離別法」は『呪詛調法記』の前後に成立した別の書物からも確認できた。それらの書物をあわせて考察すると、中世庶民信仰との関係や「我・念・君」が使われることの意味などが徐々に浮かび上がる。

まず、『呪詛調法記』より前に出版された貞享元年（1684）刊の『邪兇呪禁法則』という書物がある。この書物は上・中・下三巻（岩瀬文庫蔵本は三巻三冊であるが、後刷りに三巻一冊、二巻一冊本も存在する）からなり、貞享2年（1685）刊『改正広益書籍目録』、元禄5年（1692）刊『広益書籍目録』と元禄12年（1699）刊『新版増補書籍目録』では「真言宗」の項に入れられており、元禄9年（1696）と宝永6年（1709）刊の『増益書籍目録大全』では「仏書」と分類されている<sup>[15]</sup>。『邪兇呪禁法則』の表記はカタカナを交える楷書体の漢字を主体とし、寺院等において出版された古活字本に彷彿させる形式を有している。ただ、前書き・目次・挿絵はなく、本文の前後において呪符・呪法の配置なども統一されていない。刊記にある中野小左衛門は京都の初期出版業老舗中野氏一族の一人であり、経営する書肆は寺町五条上ルに位置し、刊行書は全体として仏書がもっとも多いらしく、貞享2年刊『京羽二重』の書物屋の項には「真言書」と記されている<sup>[16]</sup>。「離別守」の呪符部分をみると、『呪詛調法記』のと同じものであると認められる（図4）。また、呪法部分を読んでも、『呪詛調法記』に記されているのと同じ内容であることがわかる。

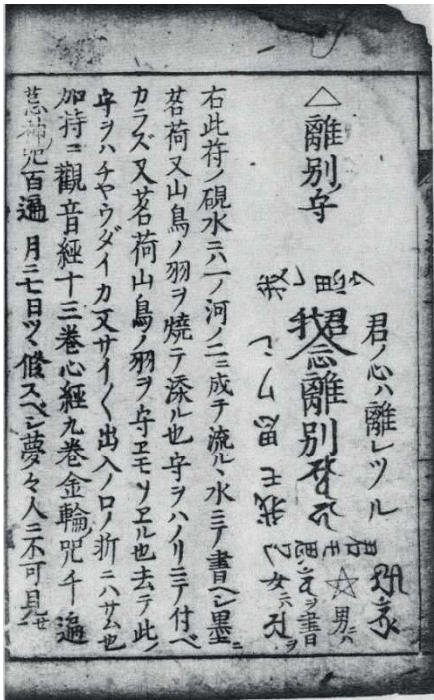


図 4 『邪呪呪禁法則』に収録されている「離別守」(近世文学書誌研究会『重宝記集一』、東京：勉誠社、1979年4月、38頁。)

形態や文体の違いが大きいものの、両書は主旨が類似しており、内容が完全に一致する項目も多い。『日本古典文学大辞典』によれば、「重宝記」類の書籍は「先行文献の無断借用が多く、それを糊と鈔とで手軽に編成した傾きがある」<sup>[17]</sup>。したがって、筆者は最初、『邪呪呪禁法則』のほうがいわば祖本であり、『呪詛調法記』の「此一冊予が家の秘書也」という序文は近世出版業によく見られる宣伝文言にすぎないと考えていた。しかし、近世における著作権問題に関する論考を読むと、重版・類版など著作権侵害にあたる事案に対して、当時は本屋仲間という組織が自主的に対処し、かなり厳しい規制・裁定を下していたことがわかった<sup>[18]</sup>。つまり、剽窃問題として糾弾されないのは、表記形式を変え、板を改めたからではなく、もともと典拠が別々にあるからと推測することができる。

また、『増補呪詛調法記大全』として刊行された際に変更された序文にある「蓋修験家之書」という文言も実際、典拠に関する重要な手がかりを与えてくれた。小池淳一の研究によると、対馬の「諸呪覚」や埼玉の「万呪乃法」など各地の民俗調査で見出された「まじない」を記した文書類は、『呪詛調法記』と重なる内容のものが少なくなく、その中には「あたかも修験道や仏教などで用いられる切紙<sup>[19]</sup>の様式に仕立てた」ものもあるという<sup>[20]</sup>。だが、重宝記と切紙、両者の関係がむしろその逆で、切紙こそが「日用まじない」の本来の姿であり、特定の宗派やルートによって形成・伝承されたものではなく、さまざまな民間伝承と同様に各地に点在し、広く長く伝存してきたものではなからうか。それゆえ、祖本または明晰な系譜を探求するのは極めて困難であると認めざるをえない。

以上の推測を裏付ける資料として見つかったのが『修験深秘行法符呪集』(以下『符呪集』)である。

『符呪集』は『修験道章疏二』に収録されており、その内容は、編者の中野達慧が修験道智山派の隆誉の『十結拔次第』十巻、『秘術拔集記』五巻を中心に、三宝院義演集録の切紙、金峯山大先達勸修寺蓮光坊良勝伝授の切紙などから集めた 449 法をまとめたものである。それらの切紙の成立年代は、室町時代から江戸初期のものが大部分となっている。「離別法」と題される呪符（図 5）は『符呪集』の第九巻に収録されており、おそらく各地の修験者が所持していた修験独自のものと思われる<sup>[2]</sup>。



図 5 『修験深秘行法符呪集』巻九に収録されている「離別法」に用いられる符（日本大蔵経編纂会『修験道章疏二』、東京：日本大蔵経編纂会、1919 年 4 月、126 頁。）

活字になることにより、「我・念・君」の三文字の組み合わせる様子がわかりづらくなっているが、これもあきらかに前記の「離別のまもり」「離別守」と同一の符である。呪具に関する記述も前記二種の書物とほぼ一致し、符を書くための墨は川の水が二股になる直前の位置から取った水で磨り、さらに茗荷・山鳥の尾を焼いてその墨に入れるよう指示されている。念じる回数は書かれていないが、呪文として用いる観音経・金輪呪・荒神呪の三点も前記二種の書物と同様である。ただ、呪法、すなわち符の使用方法は異なっている。「離別のまもり」「離別守」は符の領受、または出入り口の軒に挟むことが指示され、「離別法」は別れたい相手に知られないように符を着物の襟に入れ置くことが要求される。そして、注意すべきは、「離別法」という項目の後に「別大事」「同大事」「内符ノ口伝」と題される三つの段落があり、呪符の代わりに人形を作って使用する別バージョンの離別呪術が付記されていることである。人形を主要呪具とするこの三つの方法にも山鳥の羽・引尾が共通的に使われるが、そのほかに呪文・呪法における共通点は特に見られない。

修験道の儀礼は、修験道そのものがそうであったように、特定の教祖によって定められたものではなく、古代日本人の素朴な山岳信仰、密教・道教など外来宗教の影響を受けて次第に体系化し、複雑な様相を呈するようになり、さまざまな時期に作りあげられた儀礼が同じ時代に並行して連綿と続いたものである<sup>[2]</sup>。『符呪集』にまとめられたものをみると、民衆の生活需要に応じておこなう「まじない」は、呪術宗教的活動を担う修験者によって象徴的要素が比較的自由に組み合わせられ、実行されていたことがはっきりとわかる。さらに、類似の符呪は栃木県鹿沼市薬王寺所蔵天文二十二年（1553）書写符呪集

と室町末期の『呪詛（咀）秘伝書』に記載されたものが存在し、笹原宏之の研究によると、「我念君」の合字的な呪符は、室町時代に相思相愛と離別を願う二つの符に分化したようである<sup>[23]</sup>。元興寺極楽坊所蔵の「離別祭文」も確かにその一群の呪術に属するものといえよう。

特定の呪的符号がいつ・どこから発祥したかを突き止めることが困難である以上、それが何を象徴し、どのような原理・思想に則って呪術に組み入れられたかを分析することのほうが重要になる。修験道儀礼における文字の記入は、符呪等の時に多く見られる象徴行動であり、書かれる符はいくつかのシンボルが組み合わせられることによって多種多様な教義を習合した象徴的世界観を表す。主に共通するシンボルには、崇拜対象の名、諸仏諸尊の種子、真言の類、経文や陀羅尼の一部、鬼・山・戸などの文字、急急如律令の文字、日・月・星を象徴する印などがある。呪文には、密教に関するものや人名のほか、和歌・漢詩などの文学的表現を借りて願望・命令、予期する成果の達成状況などを唱えるものもある<sup>[24]</sup>。

以上の先行研究を念頭に置きながら、あらためて図3・4・5の符を見ると、この符は大きく三つの部分に分けられる。まず、「我・念・君」の組み合わせ文字と「離別」「ソワカ（梵字）」が大きく縦に書かれ、符の中心部となる。「ソワカ」は、周知のように、密教呪文の最後につけて願いの成就を祈る語であるため、「離別」がすなわち目的であり、「願望」にあたることを示している。中心部分を囲む「我レ思ウ君ノ心ハ離レツル、君モ思ワジ我モ思ワジ」という文言は、枠のように時計回りに書かれ、「予期した成果の達成状況」を表現している。最後に、その枠の下に書かれる梵字種子「シリ」と「ポローン」の二文字、星印および男女別の種子<sup>[25]</sup>は、「崇拜対象」を表すシンボルであり、超自然的な力の源とみなされていた。

ちなみに、この符は大正以降に出版された『萬呪秘法』という書にも掲載されている。図6でわかるように、「我・念・君」は組み合わせられておれず、梵字部分は簡略化され、変形が激しい。また、江戸期において枠の下に位置していた梵字種子と星印は、符を包む紙の表裏にそれぞれ書くようになった。

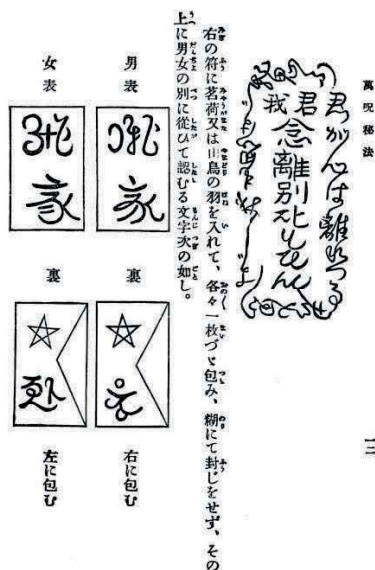


図6 「男女縁切の呪」に用いられる符（椎尾定吉『萬呪秘法』、東京：己羊社、1920年8月、12頁。）



## 「念」は反語ではない

既述のように、川が二股に分かれるところから水と取って呪符を書くための墨を磨ることや、「食べる」と物忘れがひどくなる」と信じられていた茗荷を呪具として使う点からみると、男女の「離別」を目的とするこの一連のまじないは、原始的な類感呪術に分類することができる。しかし、何といても、茗荷が持つ「忘」の象徴性と組み合わせ文字の「念」の対比は興味深い。

「我・念・君」は本当に藤澤が説いたように「反語」なのか。もしそうであれば、その否定性を持つ文意はどこに由来するものなのか。実際、平城宮跡から出土した墨書土器に書かれる「取ること勿れ」などの注意書き<sup>[26]</sup>を見ると、当時の漢文文法として否定語を使わない否定文は考えにくい。また、組み合わせ文字が書かれている当該墨書土器にも「莫採・鸚鵡鳥坏」の表記があり、痕跡から見て組み合わせ文字より先に書かれたものである。「莫採」の注意書きと全く逆方向から一部被せるように書かれていることから、使用済みの土器を使った落書・習書として捉えたほうが自然である。いまのところ、否定性の由来として唯一考えられる可能性は、組み合わせ文字の交叉部分が「×（斜め十字）」に見えることと何らかの関係を生じていることである。なぜなら、斜め十字文は「封印」「否定」の意味を表すシンボルとして、人類のほぼすべての文明に見いだされることができ、文化的普遍性を持つ記号だからである。しかし、次節で詳述するが、長沙窯製品に記されている「我・念・君」は、否定的な意味を持っているものとしてみるのが難しい。

したがって、ここで藤澤説と異なる推論を提示したい。筆者が「反語」という解釈を支持できないのは、藤澤説は「我・念・君」の組み合わせ文字を離別用の呪符そのものと同一視しているからである。確かに、この組み合わせ文字は呪符の中心部分に位置し、あきらかに重要な役割を持っている。しかし、それはあくまで呪符を構成する文字の一部にすぎない。

「我」「君」は唐代の市井で流行していた男女の恋愛詩にもよく使われる人称代名詞である。たとえば、「君が生まれた時は私がまだ生まれていない。私が生まれた時は君がすでに年をとった。君は私の生まれが遅いのを恨み、私は君の生まれが早いのを恨む〔君生我未生、我生君已老。君恨我生遅、我恨君生早〕」という題詩が書かれている長沙窯製品は現在一四件確認されている。ちなみに、この詩は敦煌遺書として知られる仏教説話『盧山遠公話』にある「身生じて智未だ生ぜざれば、智生ずるも身は已に老ゆ。身は智の生ずることの遅きを恨み、智は身の生ずることの早きを恨む。身と智と相逢わずして、嘗て幾たびの老いをか経ん。身と智ともし相逢わんには、即ちに仏道を成ずるを得ん〔身生智未生、智生身已老。身恨智生遅、智恨身生早。身智不相逢、曾經幾度老。身智若相逢、便得成仏道〕<sup>[27]</sup>」という偈を改作したものとして認められる。「我」「君」が対句表現で男女関係の象徴としてまじないに使われるのは、おそらくその類の漢詩の影響を受けたからであろう。「念」は文字通り、祈念という行為を表す動詞でもある。下に「離別」という目的語がつくからこそ、「男女ともに離別を念ずる」という達成状況を象徴するものになりえたのではないか。そのため、伝播の過程において「我」「君」の交叉部分が解かれたとしても、符の象徴性には特に影響しなかった。言いかえれば、文字の位置と配列順さえ合っていれば、符は成立するため、斜め十字文がもつ否定的な意味合いと関連付ける必要はない。

以上をまとめると、この組み合わせ文字は、単体で「思はじ」の意味を為したのではなく、離別の呪符を完成させるにはかならず下の「離別」の二文字とセットで使わなければならない。「我・念・君」だけだと機能が不完全であり、離別を目的とするものと決まったわけではない。ただ、日本においてこの



三文字がかつて組み合わせられた形で離別の呪符に使用されていたことは事実である。その発想はいったいどこからきたものか、それが平城宮という時空間に存在する意味とは何か、などがつぎに解決すべき問題となる。

### 三 文字遊戯のシルクロード

#### 長沙窯製品：離れがたい「念」

本論文の考察対象である当該墨書土器は平城宮内裏北外郭官衙のゴミ捨て穴 SK820 から出土したものであり、およそ745年から747年頃に使われたものとあきらかになっている。一方、長沙窯製品に関係する最早の紀年は763年であるが、表面に題詩が記されているものは主に806年から875年の間に製作された<sup>[28]</sup>。長沙窯は中国湖南省長沙市望城県石渚湖から銅官鎮一帯に位置する陶磁窯遺跡であり、そこで作られた製品は1956年から2017年までにおこなわれた四回にわたる大規模な発掘調査によって出土しただけでなく、1998年から2001年までにおこなわれた唐代沈没船「黒石号」に対する水中発掘調査からも大量に引き揚げられた。その後、個人の収蔵品として72点ほど発見されている。日本における漢字使用の歴史から鑑みると、「我・念・君」の組み合わせ文字も中国に起源を有するものと考えたほうが自然であるが、上述のように、遺物の年代差がかなりあるため、現段階では直ちに中国伝来のものと断定することはできない。

「我・念・君」の組み合わせ文字が焼き付けられている水注は、1983年に出土した長沙窯遺物群に含まれる。当該遺物群のうち、題詩・銘字・款識のある製品は248件確認されている。同じ水注の注口下の外側には、唐の詩人張翥<sup>ちゅう</sup>（653-745）作『醉吟三首』のうちの一詩「去年は耕せる農地はなく、今春には酒を買う金も足りない。花鳥に笑われるのを恐れ、酔ったふりをして池苑の楼台に臥した〔去歳無田種、今春乏酒財。恐他花鳥笑、佯醉臥池臺〕」も書かれている（図7）<sup>[29]</sup>。ただし、それが「我・念・君」との間に実際どのような脈絡があるかはわからない。張翥は隠居道士として知られている人物であり、『歴世真仙体道通鑑』『三洞群仙録』に伝記が残されている。この背景知識から、組み合わせ文字と道教の関連性を想像してしまうが、長沙窯題詩の内容からみた全体的な傾向から考察すると、おそらく無関係であろう。筆者が関連書籍と論文<sup>[30]</sup>から収集できた長沙窯題詩（四句以上となるもの）の数は現在99首にのぼる。テーマで分類・統計した結果は、「旅情」が31首、「世情」が19首、「飲酒」「閨情」が各11首、「学問」「文字遊戯」が各7首、「金銭・商売」が6首、「仏教関連」「その他情景」が各4首となる（附表）。詩文表現の傾向から察せるように、長沙窯製品の題詩には唐末のデカダンスが色濃く反映されている。

さらに、「飲酒」をテーマとした題詩は必ず容器の用途に合わせて水注に書かれ、「閨情」をテーマとしたものは陶枕などに書かれることが多い。要するに、題詩は書としての装飾性のみならず、製品の機能に沿った内容によって、一種の販売促進手法をも兼ねている。やや印象論になるが、題詩のテーマからは、これらの製品が当時実際に使われていた場所、つまり販売先が馭家・宿所であることも概ね推測できるのではないかと。『醉吟三首』のうち一詩が水注に書かれたのは、道教思想との関連性よりも、「飲酒」をテーマとしているからという単純な理由が認められる。長沙窯製品の商品性に鑑みると、同じ水注に書かれる「我・念・君」の組み合わせ文字は、離別を祈念するものとは考えにくい。附表の題詩を読めばわかるように、離別に関わる表現が多く目に付く。しかし、それらはいずれも離別を嘆くものであり、恋焦がれる感情と旅人の帰りを待ちわびる心境を語るものである。たとえば、附表42番の「君が

去ってから、昼も夜も恋焦がれる。幾年も会えずに、断腸の涙が衣を湿らす〔自從君去後、日夜苦相思。不見來經歲、腸斷淚霑衣〕が典型的である。組み合わせ文字は題詩ではないが、テーマで分類するならば、筆者は「我・念・君」を「閨情」または「文字遊戯」に入れるだろう。少なくとも、長沙窯製品という文脈において、「我」と「君」の筆画が交叉して生まれたこの「念」は、字形と字義の相乗効果によって、男女の「相思」、あるいは肉感的な交わりを表現するものだと理解したほうが自然であろう。あるいは、これが当時市井で流行だった記号であり、いわば相合傘のような、男女の仲を表す周知の落書きである可能性もある。いずれにしても、水注の表面に焼き付けられることから、現代の器にも用いられる「中華模様」の双喜紋に通ずる強烈な象徴性が感じられる。



図7 長沙窯製品に見られる「我・念・君」および同じ水注に書かれている題詩（李效偉『長沙窯：大唐文化輝煌之焦点』、長沙：湖南美術出版社、2003年11月、25・26頁、図43・44）

#### 【附表】長沙窯製品題詩およびテーマ分類

1	日日思前路、朝朝別主人。行行山水上、處處鳥啼新。	旅情
2	祇愁啼鳥別、恨送古人多。去後看明月、風光處處過。 * 古人皆有別、此別淚很多。去後看明月、風光處處過。	旅情
3	一別行千里、來時未有期。月中三十日、無夜不相思。 * 一別行千里、來時未有期。月中三十日、無日不相思。	旅情
4	小水通大河、山深鳥宿多。主人看客好、曲路亦相過。 * 小水通大河、山高鳥宿多。主人居此宅、曲路亦相過。 * 小水通大河（河）、山高鳥宿（雀）多。主人看客好、曲路亦相過。	旅情
5	君生我未生、我生君以（已）老。君恨我生遲、我恨君生早。	仏教関連

6	天明日月箭、立月已三龍。言身一寸謝、千里重金鐘。	文字遊戲 (離合)
7	去去關山遠、行行湖 (胡) 地深。早知今日苦、多與畫師金。	旅情
8	自從君去後、常守舊時心。洛陽來路遠、凡用幾黃金。	旅情
9	客來莫直入、直入主人嗔。打門三五下、自有出來人。	金錢・商売
10	上有東流水、下有好山林。主人居此宅、日日斟量金。 *上有東流水、下有好山林。主人有好宅、日日斟量金。	金錢・商売
11	作客來多日、常懷一肚愁。路逢千丈木、堪作坐竹 (望鄉) 樓。	旅情
12	歲歲長為客、年年不在家。見他桃李樹、思憶後園花。	旅情
13	自從為客來、是事皆隱忍。若有平山路、崎嶇何人盡。	旅情
14	天地平如水、王道自然開。家中無學子 (士)、官從何處來。	學問
15	去歲無田種、今春乏酒財。恐他花鳥嘆、伴醉臥池臺。	飲酒
16	我有方寸心、無人堪共說。遣風吹卻雲、託向天邊月。 *我有一片心、無人堪共說。遣風吹卻去、語 (言) 向天邊月。	世情
17	夕夕多長夜、一一二更初。田心思遠路、門口問征夫。 *冬日多長夜、一天二更初。問心思逐客、門口問經夫。	閨情/文字遊戲 (離合)
18	男兒大丈夫、何用本鄉居。明月家家有、黃金何處無。	旅情
19	龍門多貴客、出戶是賢賓。今日歸家去、無言謝主人。	旅情
20	自入新豐市、唯聞舊酒香。抱琴沽一醉、盡日臥垂楊。 *近入新豐市、唯聞舊酒香。抱琴沽一醉、終日臥□□。 *自入新豐市、唯聞舊酒香。抱琴沽一醉、盡日臥垂楊。	飲酒
21	二月春豐 (風) 酒、紅泥小火爐。今朝天色好、能飲一盃無。	飲酒
22	聞流不見水、有石復無山。金瓶成 (盛) 碎玉、掛在樹枝間。	文字遊戲 (謎: 石榴)
23	人歸萬里外、意在一杯中。祇慮前途 (程) 遠、開帆待好風。 *人歸千里外、心盡一杯中。莫慮前途遠、開帆逐便風。	旅情
24	萬里人南去、三秋鴈不 (北) 飛。不知何歲月、得共女 (汝) 同歸。	旅情
25	不意多離別、臨分灑淚難。愁容生白髮、相送出長安。	旅情
26	一日三場戰、曾無獎罰名。將軍馬前坐、將 (戰) 士雪中眠。 *一日三場戰、離家數十年。將軍馬上坐、將士雪中眠。	旅情
27	海鳥浮還沒、山雲斷更連。棹穿波上月、舸壓水中天。	その他情景
28	寒食元無火、青松自有烟。鳥啼新柳上、人拜古墳前。	世情
29	小小竹林子、還生小小枝。將來作筆管、書得五言詩。	學問

30	白玉非為寶、千金我不須。意念千張紙、心存萬卷書。	學問
31	念念催年促、由(猶)如少水魚。勸諸行過眾、修學至無餘。	佛教闍連
32	劍缺那堪用、霞(瑕)珠不值錢。芙蓉一點污、□人那堪憐。	世情
33	孤竹生南嶺、安根本自危。每蒙東日照、常恐北風吹。	世情
34	備(避)酒還逢酒、逃盃反被盃。今朝酒即醉、滿滿醉將來。	飲酒
35	終日如醉泥、看東不辨西。為(惟)存酒家令、心裡不曾迷。	飲酒
36	春水春池滿、春時春草生。春人飲春酒、春鳥弄春聲。	飲酒
37	七賢第一祖(組) 須飲三杯萬士(事) 休、眼前花撥(發) 四枝(肢) 柔(柔)。不知酒是龍泉劍、喫入傷(腸) 中別何愁。	飲酒
38	入池先弄水、岸上拂輕沙。林裡驚飛鳥、園中掃落花。	文字遊戲 (謎：風)
39	遠送還通達、逍遙近首邊。遇逢退瀟過、進退竟瀟連。	文字遊戲 (同部首字)
40	□□□□岩、□□□[山硯][山石山]。□□[山石石] [山石石不][山得]、□□□[山石石將][山石石還]。	文字遊戲 (同部首字)
41	單喬亦是喬、著木亦成喬(橋)。除卻喬邊木、著女便成嬌。	文字遊戲 (離合)
42	自從君去後、日夜苦相思。不見來經歲、腸斷淚沾衣。	閨情
43	道別即須分、何勞說苦新(辛)。牽牛石上過、不見有啼(蹄) 恨(痕)。	旅情
44	古人皆有別、此別淚痕多。送客城南酒、懸令聽楚歌。	旅情
45	□□□家日、□途柳色新。□(堂力) 前辭父母、灑淚別尊親。	旅情
46	一雙青鳥子、飛來五兩頭。借問紅輕重、附言到揚州。	旅情
47	有僧長寄書、無信長相憶。莫作瓶落井、一去無消息。	旅情
48	鳥飛平無(燕) 近遠、人隨流水東西。白雲千里萬里、明月前溪後溪。	旅情
49	夜夜携長劍、朝朝望楚樓。可憐孤夜月、偏照客心愁。	旅情
50	自入長信宮、每對孤燈泣。閨門鎮不開、夢從何處入。	閨情
51	日紅衫子合羅裙、盡日看花不厭春。更向妝台重注口、無那蕭郎慳煞人。	閨情
52	幼小深閨養、昨霄(宵) 春睡重。□□□□□、□□□□□。	閨情
53	新婦家家有、新郎何處無。論情好果報、嫁取可憐夫。	閨情
54	二八誰家女、臨河洗舊妝。水流紅粉盡、風送綺羅香。	閨情
55	熟練輕容軟似綿、短衫披帛不緜綆。蕭郎急臥衣裳亂、往往天明在花前。	閨情

56	一畧（樹）寒梅南北枝、每年花發不同時。南支（枝）昨夜花開盡、北內梅花猶未知。	世情
57	衣裳不如法、人前滿面修（羞）。行時無風彩（采）、坐在下行頭。	世情
58	忽起自長呼、何名大丈夫。心中萬事有、不愁手中無。	學問
59	街（階）下後梅樹、春來畫（花）不成。（腹）中花易發、蔭處苦難生。	世情
60	凡人莫偷盜、行坐飽酒食。不用說東西、汝亦自繚（條）直。	金錢・商売
61	買人心惆悵、賣人心不安。題詩安瓶上、將與買人看。	金錢・商売
62	聖水出溫泉、新陽萬里傳。常居安樂國、多報未來緣。	仏教聞處
63	東家種桃李、一半向西鄰。幸有餘光在、因何不與人。	世情
64	上有千年鳥、下有百年人。丈夫具紙筆、一世不求人。	學問
65	男兒愛花心、徒勞費心力。有錢則見面、無錢不相識。	金錢・商売
66	春來花自笑、春去葉生愁。千今（金）乍可得、年年枉為流。	金錢・商売
67	無事來江外、求福不得福。眼看黃葉落、誰為送寒衣。	世情
68	主人不相識、獨坐對林全（泉）。莫慢愁沽酒、懷中自有錢。	飲酒
69	東閣多添酒、西關下玉關。不須愁日夜、明月送君還。	飲酒
70	那日君大醉、昨日始自醒。今日與君飲、明日用斗量。	飲酒
71	君去遠秦川、無心戀管弦。空房對明月、心在白雲邊。	閨情
72	孤雁南天遠、寒風切切驚。妾思江外客、早晚到邊亭（亭）。	閨情
73	鮑耳行來久、尋常暖寄衣。今寒至莫送、來急自言歸。	旅情
74	地接吾城近、聞君遇夕陽（陽）。白雲留不住、萬里獨歸鄉。	旅情
75	忽憶邊庭事、狂夫未得歸。有書無寄處、空羨雁南飛。	旅情
76	來時為作客、去後不身陳。無物將為信、流（留）語贈主人。	旅情
77	澧河青石水、安居湖裡邊。有心相（想）故家、將書待客來。	旅情
78	頻頻來作客、擾亂主人多。未有黃金贈、空留一量靴。 *作客來多日、煩夕（擾）主人深。未有黃金贈、空留一片心。	旅情
79	昨夜垂花宿、今朝蕩路歸。面上無光色、滿懷將與誰。	旅情
80	離國離家整日愁、一朝白盡少年頭。為轉（尋）親故知何處、南海南邊第一州。	旅情
81	造得家書經兩月、無人為我送將歸。敬憑鴻雁寄將去、雪重天寒雁不飛。	旅情
82	君弄從君弄、擬弄恐君真。空房閑日久、政（正）要解愁人。	閨情
83	竹林青付付（鬱鬱）、鴻雁北向飛。今日是假日、早放學即歸。	學問
84	住在綠池邊、朝朝學采蓮。水深偏責（側）就、蓮盡更移缸。	その他情景

85	公子求賢未識真、欲將毛遂比常倫。當時不及三千客、今日何如十九人。	学問
86	今歲今宵盡、明年明日開。寒隨今夜走、春至主人來。	世情
87	嶺上平看月、山頭坐聽風。心中一片氣、不與女人同。	世情
88	不短復不長、宜素復宜妝。酒添紅粉色、杯染口脂香。	飲酒
89	從來不相識、相識便成親。相識滿天下、知心能幾人。	世情
90	後歲迎新歲、新天接舊天。元和十六載、長慶一千年。	世情
91	借問東園柳、枯來得幾年。自無枝葉分、莫怨太陽偏。	世情
92	柳色何曾具（見）、人心盡不同。但看桃李樹、花發自然紅。	世情
93	年年同開閣、天天下歡筆。□□□□□、□□□□□。	世情
94	破鏡不重照、落花難上枝。行到水窮處、坐看雲起時。	世情
95	青驄飲淥（緑）水、雙吸復雙呼。影裡蹄相踏、波中髻對烏。	その他情景
96	忍辱成端政、多嘖作毒蛇。若人不逞惡、必得上三車。	世情
97	欲到求仙所、王母少時開。卜人缸上坐、合眼見如來。	仏教関連
98	終日池邊走、無有水雲深。看花摘不得、屈作采蓮人。	その他情景
99	三伏不曾搖扇、時看澗下樹陰。脫帽露頂折腹、時來清風醒心。	世情

（採録順は参考文献にしたがい、遺物にある原字に近づくために旧字体を使用した。括弧内は文意に沿って校正した字である。標点及びテーマ分けは筆者による。「\*」印付きのものは、同じ詩の異文と思われる。）

### 幡垂飾形遊戯詩と仏教詩稿断片

ここで「我・念・君」の組み合わせ文字に関して、さらに参考資料を二点提示したい。

既述のように、長沙窯製品に書かれている同部首漢字による遊戯詩は敦煌文献にある学童習書とほぼ一致する。梁海燕の考証によると、長沙窯題詩のうち、敦煌文献から完全または部分的に一致する作品が見出せるのは16例ほどある。その中に筆者が特に注目したのは「長い夜が多く、気が付くと毎回二更のはじめの時刻になる。心の中では遠路を思い、門口で旅人に問う〔夕夕多長夜、一一二更初。田心思遠路、門口問征夫〕」という「離合（漢字をパーツに分解・組み合わせる）」の手法を使った遊戯詩である。この詩は、各句の最初の二文字を組み合わせると、三番目の文字になるという特徴が目立つ。敦煌文献P.3597の学童習書「日々妓楼から、山々の端に出没する雲を眺める。心の中では遠客を思い、門口で旅人に問う〔日日昌（倡）楼望、山山出沒雲。田心思遠客、門口問征夫〕」に非常に似ている。

さらに、これと類似する詩作は敦煌文献においてやや特殊な形に書かれている例が確認されている（図8）。読み方は「日々妓楼から、山々の端に出没する雲を眺める。心の中では遠客を思い、門口で古い師に問う。口紅は不足なく整っているのに、求める人は現れない〔日日昌（倡）楼望、山山出沒雲。田心思遠客、門口問真人。口之（脂）足（原文は「足」の異体字）法用、不見覓（覓）地（右側の「之」と同義）人〕」と思われる。形は法隆寺献納宝物の中に残されている七世紀の幡垂飾によく似た菱形文に見



えるため、仮に「幡垂飾形遊戯詩」と名付けた。もとななる離合詩がわからなければ、幡垂飾の形に並べられたこれらの文字を五言詩として解読するのはなかなか難しいであろう。あるいは、「我・念・君」の組み合わせ文字もこのような詩を視覚的に表現したものかもしれない。直接な関係はないが、漢字を組み合わせる多角形に並べるような遊戯的かつ装飾的表記が西域の敦煌文献から日本の墨書土器にまで類例が存在し、九世紀においてグローバルな貿易商品であった長沙窯製品にも使われていたという事実は、参考価値が高いといえよう。



図8 敦煌文献 S.3835V/6 の幡垂飾形遊戯詩（中国社会科学院歴史研究所『英藏敦煌文献：漢文佛經以外部分』五、成都：四川人民出版社、1992年9月、170頁）

もう一つ参考になるのは、大谷文書 1534 番「仏教詩稿断片」に書かれている「一心君念我、二心我念君。君心念我口、我ノ情」<sup>32)</sup>である。現段階において筆者の調べた限りでは、「我・念・君」と文字順的・年代的にもっとも近い資料となる。この断片は、大谷探検隊メンバーが 1903 年に西域北道の要衝亀茲（庫車）の周辺を中心に調査した際、ドゥルドル・オコルから発見した「幾多の漢字ある紙片」のうちの一片である。同地点から出土した 1535 番の資料には「金沙寺」という寺院名と「掬拓使」の文字が記されている。小田義久の研究<sup>33)</sup>によると、当該地域は漢代より多くの漢人が移り住んで漢文化圏を形成し、玄奘がその地を訪れた貞観の初め頃には、人口のおよそ一割が仏教徒だったと言われている。「金沙寺」のような三文字の寺名が主流となったのは唐がトゥルファン盆地にさかえた魏氏高昌国を滅した後の西州時代（640-791）とあきらかになった。また、同時期にドゥルドル・オコル対岸地区から出土した紙片には天宝（742-756）・大曆（766-779）の年号が記されているため、この「仏教詩稿断片」はおおよそ七世紀中期から八世紀に書かれたと推測できる。

長沙窯製品に多い「君生我未生、我生君已老。君恨我生遲、我恨君生早」の題詩は敦煌文献にある仏教説話の偈を改作したものと知られている。以上の情報を踏まえると、「我・念・君」の組み合わせ文字も仏教関連の詩文から生まれた可能性が高いと推測できよう。正倉院に伝わる鳥毛立女屏風によく似た唐の美人画が大唐帝国の西のはずれにあるトゥルファンのアスターナ古墓からも出土している<sup>34)</sup>ことが示したように、同じ文化の古層が「東アジア文化圏」の東西のはずれの地下に眠っている。今後、漢字遊戯の水脈を指し示してくれるさらなる物的証拠が発見されることを期待している。

#### 四 推論と仮説

長沙窯製品の装飾として詩文が多く使われるのは、唐代の爛熟した文化の結実にはかならない。特に、離別を題材とした題詩からは、退廃的・感傷的・唯美的な雰囲気がかがえる。「我・念・君」がその一群の詩文に入り混じって存在するという事実は、決して無意味なことではない。未だ出典は特定できないが、平城宮跡出土の墨書土器と長沙窯製品の両方に見られるこの組み合わせ文字は、漢字圏仏教文化という伏流によってつながっていることは明らかである。仏教文学がそのような遊戯的表記を生み出す沃土であり、それらを漢字圏の隅々に運び、開花させた水脈でもあるだろう。

日本ではいままで、藤澤説の影響で、「我・念・君」が「離別の呪符」と同一視されることが多かった。しかし、本文前半で論証したように、それ自体が反語的な意味を持っていると判断するのは論理の飛躍になる。平城宮内で土器に書かれた当時のニュアンスが遊び心を込めた隠語的な記号なのか、世俗的な象徴性をもつ文様か、それとも祈りや思いが錯綜した呪的<sup>35)</sup>文字かについては、まだ明確ではない。ただ、最初から呪術用に作られたと考えるよりも、伝播の途中において徐々に原始的な宗教感情を喚起し、中世期以降、呪的要素として「離別」という庶民生活の需要と組み合わせられ、結果的に象徴システムの一部として呪術に組み込まれたと捉えたほうが合理的である。

忘れてはいけないが、当該墨書土器には「道・金・為」の組み合わせ文字も書かれている。残念ながら、それ以外の例を確認することができなかった。組み合わせ文字自体は珍しくないが、読み方として回文<sup>35)</sup>になるものは「我・念・君」を除いて見たことがない。「道・金・為」も同じ意匠であれば、読み方は順番的に「道金為・為金道」になるであろう。変体漢文として読めなくもないが、意味が通じにくい。文字的には『妙法蓮華経』の「黄金為繩、以界道側」と『薬師寺縁起』（奈良時代の流記資財帳に拠る）に記されている「以黄金為繩界道」<sup>36)</sup>などの文言を想起させるが、文字が完全に一致する例は見あたらない。

当然、「道・金・為」に言及する先行研究も見あたらず、都合よく「我・念・君」の影に隠れてしまっているようである。ただ、手がかりが全くないかといえそうでもない。実際、同じ内裏北外郭の土坑SK820からは「□〔為カ〕道□〔金カ〕」と書いた木簡の削屑が発見されている<sup>37)</sup>。この事実を合わせて考えると、土器と木簡の両方とも落書の材料である可能性は低くない。

筆者の調べでは、木簡データベースで検索した結果、「道」「為」二文字を近接に書いたものは約11点確認できた。渡邊晃宏<sup>38)</sup>の調べによると、習書木簡と認定されている木簡の積文において、字画の複雑な文字の代表として「道」「為」「長」「是」などがあり、中では「道」がとびぬけて多いが、その理由は明確ではない。習書木簡の文字出現頻度の順位表<sup>39)</sup>では、「道」「為」の二文字ともに10位以内に入っており、「金」は110位となるが、第1・2・4位の「大」「人」「天」と同じく左右に大きく払う筆画を持つ対称的な字形を有する。やや大胆な推論をするならば、平城宮の役人が中国伝来の「我・念・君」に

倣い、「道・金・為」の組み合わせ文字を応用的に作ったのではないか。「道」の右ハライと「為」の左ハライが交叉し、下に「念」と同じ「へ（ひとやね）」のつく漢字を配置する必要があるため、「金」が選ばれたのかもしれない。

以上、先行研究の成果に拠つつ論述してきた。仮説にとどまるところもあるが、考察対象の墨書土器のみならず、比較材料としての類例等に対しても、それぞれ資料群の中の一点であるということをつねに意識しながら、現段階での結論に至った。今回あげた問題点とあわせて、今後、出土文字資料および歴史文献からさらなる類例を収集し、遊戯性と呪術性を含む複層的な性質を有する可能性に注意しながら、組み合わせ文字の意味と使用目的を解明していきたい。文字遊戯は元来仏教説話に散見するが、それらが如何に民間の呪俗習俗へと土着化していったか。民間信仰の深層に潜り込んだ文字遊戯をその背後に広がる豊かな文化世界への糸口として捉えれば、新たな知見を得ることが期待できよう。これらの点については、また稿を改めることにしたい。

## 【注】

[1] この之繞の遊戯字は少なくとも四点の資料に確認されている。①敦煌文献S. 5513V「[□]路逢遇亦過、進退遑遑、送遠墨通達、逍遙近道邊。」(中国社会科学院歷史研究所『英藏敦煌文獻：漢文佛經以外部分』7、1992年12月、212頁) ②敦煌文献P. 2738V「送[□]原還通口、□□近道邊、[□]畏逢遇□□、進退速憂遠。」(上海古籍出版社 and n. Bibliothèque『法国国家図書館藏敦煌西域文獻』18、2001年12月、30頁)「彳」偏の文字も多く書かれていることから、習書と思われる。③敦煌文献BD01957号紙背「送遠墨通達、逍遙近道邊、遇逢遇亦過、進退速遑連。」(中国国家図書館『国家図書館藏敦煌遺書』27、2006年4月、192頁) 大般涅槃經卷三九寫經の余白に大きく書いている。④1983年出土長沙窯青釉褐彩詩文壺「遠送墨通達、逍遙近道邊、遇逢遇瀟過、進退遑溜連。」(長沙窯課題組『長沙窯』綜述卷、1996年、144頁)

[2] 平川南『墨書土器の研究』、東京：吉川弘文館、2000年11月、171頁。

[3] 巽淳一郎『我念君、君念我』の組み合わせ墨書文字

<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2008/01/20080101.html>、2021年9月1日引用。

[4] 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告七：内裏北外郭の調査』奈良国立文化財研究所学報26、1976年3月、104頁。

[5] 大久保正「人麿登場」、高木市之助・竹内理三編『万葉びとの世界』日本文学の歴史2、東京：角川書店、1967年6月、138頁。

[6] 藤澤説を敷衍した「我・念・君」に関する論述は、金子裕之「都人の精神生活」(岸俊男編『都城の生態』、東京：中央公論社、1987年4月、324-327頁)、佐藤信『日本古代の宮都と木簡』(東京：吉川弘文館、1997年4月、462頁)、山田邦和「II表現の諸相 三. 記号の役割」(平川南・沖森卓也・栄原永遠男・山中章編『文字表現の獲得』文字と古代日本5、東京：吉川弘文館、2006年2月、111頁)、馬場基『平城京に暮らす：天平びとの泣き笑い』(東京：吉川弘文館、2010年2月、158頁)などに見られる。

[7] 国立歴史民俗博物館『文字がつなぐ：古代の日本列島と朝鮮半島』、佐倉：国立歴史民俗博物館、2014年10月、195頁。

[8] 笹原宏之「会意によらない一つの国字の消長」、国語文字史研究会『国語文字史の研究十五』、和泉書院、2016年3月、79頁。

[9] 古代文化調査会『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡一西三条第(百花亭)跡一』、京都：古代文化調査会、2009

年9月。

- [10]小池淳一「呪法書からみた近世日本の呪術実践」『宗教研究』80(4)、2007年3月、432頁。
- [11]小池淳一「書物と呪術・秘伝」、島藺進他編『書物・メディアと社会』、東京：春秋社、2015年5月、129頁。
- [12]藤澤一夫「古代の呪咀とその遺物」『帝塚山考古学』第一号、1968年10月、67-68頁。
- [13]柴田実『中世庶民信仰の研究』、東京：角川書店、1966年、210-212頁。
- [14]宮家準『修験道儀礼の研究』、東京：春秋社、1999年9月、553頁。
- [15]近世文学書誌研究会『重宝記集一』、東京：勉誠社、1979年4月、477頁。
- [16]水雲堂・狐松子『京羽二重・京羽二重織留大全』、京都：光彩社、1968年9月、220頁。
- [17]金田金五郎・花咲一男「重宝記」、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』4、東京：岩波書店、1983年10月、280頁。
- [18]松田美由貴・日下幸男「京都本屋仲間記録『上組濟帳標目』の分析」『佛教文化研究所紀要』44、2005年11月、289-304頁。
- [19]切紙(きりがみ)：奉書紙を横に二つに折って半分に切り、秘儀の伝授などのさいに阿闍梨より授けられる儀軌の全部あるいは一部を墨書したもの。日本では特に鎌倉時代以降、密教の口伝思想や天台本覚思想の口伝法門の考え方の影響によって、仏教界で広く用いられた。修験道においても切紙による相承がきわめて重要視された。修験道の切紙は、現在も全国各地の修験者宅などに数多く保存されているが、その大半は近世期の呪符に関するものである(宮家準「切紙」『修験道辞典』、東京：東京堂出版、1986年8月、86頁)。
- [20]小池淳一「書物と呪術・秘伝」、前掲、135頁。
- [21]宮家準「修験道秘行法符咒集」『修験道辞典』、前掲、189頁。
- [22]宮家準『修験道儀礼の研究』、前掲、8頁。
- [23]笹原宏之「京都の『天橋立』を表す日本製漢字の展開と背景」注6、加藤重広・岡崎裕嗣編『日本語文字論の挑戦——表記・文字・文献を考えるための17章』、勉誠出版、2021年3月、338頁。
- [24]宮家準『修験道儀礼の研究』、前掲、519頁、554頁。
- [25]男には「ヴァン(金剛界大日如来)」、女には「ア(胎藏界大日)」と註してあるが、願主の性別なのか相手の性別なのかは不明である。
- [26]SK219から「弁埜勿他人取」と墨書した土師器の杯A1b202と「弁埜勿他人取」と墨書した土師器杯A1bが発見されている。文意はいずれも「埜を弁別し、他人のものを取ること勿れ」と思われる(奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告二：官衙地域の調査』奈良国立文化財研究所学報15、1962年5月、73頁)。
- [27]「廬山遠公の話」、入矢義高『仏教文学集』、東京：平凡社、1975年2月、116頁。
- [28]長沙窯編輯委員会『長沙窯』、長沙：湖南美術出版社、2004年12月、72頁。
- [29]詩集などでは「去歲無田種、今春乏酒材。従他花鳥笑、伴醉臥樓臺」に作るが、本稿では図7の水注実物に準じて翻字した。
- [30]長沙窯製品題詩を整理する際、以下の先行文献を参考した。
- 金程宇『稀見唐宋文献叢考』、北京：中華書局、2009年4月、195-208頁。
- 李效偉『長沙窯：大唐文化輝煌之焦点』、長沙：湖南美術出版社、2003年11月、23-119頁。
- 李建毛「長沙窯窯題詩意蘊索史札記」『南方文物』1998(3)、1998年8月、96-101頁。
- 梁海燕『唐代俗体詩研究』、北京：中国社会科学出版社、2015年9月、197-240頁。
- 任晴奇「唐長沙窯瓷器題詩芸術分析と探源」『杜甫研究学刊』2019(3)、2019年9月、112-121頁。

徐俊「唐五代長沙窯瓷器題詩校證——以敦煌吐魯番寫本詩歌參校」『唐研究』4、1998年12月、67-97頁。

楊明璋「關於敦煌詩的幾則新發現」『清華學報』38(1)、2008年3月、157-174頁。

[31]「田心」の意味が不明なため、ここでは仏教語の「心田」と解して、「内心/心」と訳した。

[32]『大谷文書集成』による第三句の釈文は「君心念我如？」(龍谷大学仏教文化研究所『大谷文書集成』1、京都：法藏館、1984年3月、78頁)となっているが、龍谷大学図書館古典籍情報システム大谷探検隊シルクロード収集資料(大谷文書)デジタルアーカイブ(<http://www.afc.ryukoku.ac.jp/Komon/data/1509/img0031.jpg> 最終閲覧日：2021年9月1日)の画像を参照したところ、「女」偏しか残っておらず、「如」とするのには無理があるとして、筆者なりの釈文にした。改行は／で示した。

[33]小田義久『大谷文書の研究』、京都：法藏館、1996年2月、10-11、324-334頁。

[34]丸山裕美子『正倉院文書の世界：よみがえる天平の時代』、東京：中央公論新社、2010年4月、275頁。

[35]日本語における「回文」は、上から読んでも下から読んでも同じになる文句を指すが、中国語では「順に逆に、また縦に横にいずれに読んでも意味を成す詩文」(愛知大学中日大辞典編集部「回文」『中日大辞典』増訂版、東京：大修館書店、1986年4月、823頁)という意味も含まれる。

[36]白鳳文化研究会『薬師寺白鳳伽藍の謎を解く』、東京：富山房インターナショナル、2008年5月、60頁。

[37]奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所史料5 別冊：平城宮木簡一 解説』、1969年11月、169頁。

[38]渡邊晃宏「日本古代の習書木簡と下級官人の漢字教育」、高田時雄編『漢字文化三千年』、京都：臨川書店、2009年7月、109頁。

[39]同、表。

## 【参考文献】

(日本語)

愛知大学中日大辞典編集部『中日大辞典』増訂版、東京：大修館書店、1986年4月

馬場基『平城京に暮らす：天平びとの泣き笑い』、東京：吉川弘文館、2010年2月

藤澤一夫「古代の呪咀とその遺物」『帝塚山考古学』第一号、奈良：帝塚山考古学研究所、1968年10月

白鳳文化研究会『薬師寺白鳳伽藍の謎を解く』、東京：富山房インターナショナル、2008年5月

平川南『墨書土器の研究』、東京：吉川弘文館、2000年11月

入矢義高『仏教文学集』、東京：平凡社、1975年2月

近世文学書誌研究会『重宝記集一』、東京：勉誠社、1979年4月

岸俊男編『都城の生態』、東京：中央公論社、1987年4月

古代文化調査会『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡一西三条第(百花亭)跡一』、京都：古代文化調査会、2009年9月

国立歴史民俗博物館『文字がつなぐ：古代の日本列島と朝鮮半島』、佐倉：国立歴史民俗博物館、2014年10月

小池淳一「呪法書からみた近世日本の呪術実践」『宗教研究』80巻4号、東京：日本宗教学会、2007年

小島憲之・木下正俊・東野治之『萬葉集』新編日本古典文学全集7、東京：小学館、1994年5月

龍谷大学仏教文化研究所『大谷文書集成』1、京都：法藏館、1984年3月

丸山裕美子『正倉院文書の世界：よみがえる天平の時代』、東京：中央公論新社、2010年4月

松田美由貴・日下幸男「京都本屋仲間記録『上組濟帳標目』の分析」『佛教文化研究所紀要』44、京都：龍谷大学佛教文化研究所、2005年11月

宮家準『修驗道辞典』、東京：東京堂出版、1986年8月

宮家準『修驗道儀礼の研究』、東京：春秋社、1999年9月

長友千代治編『重宝記資料集成 16 俗信・年曆』、京都：臨川書店、2006年3月

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所三〇周年記念史料（史料第25冊）』、平城宮出土墨書土器集成 I』、奈良：奈良国立文化財研究所、1983年3月

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所史料5 別冊：平城宮木簡一 解説』、奈良：奈良国立文化財研究所、1969年11月

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告七：内裏北外郭の調査』奈良国立文化財研究所学報 26、奈良：奈良国立文化財研究所、1976年3月

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告二：官衙地域の調査』奈良国立文化財研究所学報 15、奈良：奈良国立文化財研究所、1962年5月

日本大藏経編纂会『修驗道章疏二』、東京：日本大藏経編纂会、1919年4月

日本古典文学大辞典編纂委員会『日本古典文学大辞典』4、東京：岩波書店、1983年10月

小田義久『大谷文書の研究』、京都：法藏館、1996年2月

大久保正「人麿登場」、高木市之助・竹内理三編『万葉びとの世界』日本文学の歴史 2、東京：角川書店、1967年6月

笹原宏之「会意によらない一つの国字の消長」、国語文字史研究会編『国語文字史の研究十五』、和泉書院、2016年3月

笹原宏之「京都の『天橋立』を表す日本製漢字の展開と背景」、加藤重広・岡崎裕嗣編『日本語文字論の挑戦——表記・文字・文献を考えるための17章』、勉誠出版、2021年3月

佐藤信『日本古代の宮都と木簡』、東京：吉川弘文館、1997年4月

柴田実『中世庶民信仰の研究』、東京：角川書店、1966年

椎尾定吉『萬呪秘法』、東京：己羊社、1920年8月

島藺進他編『書物・メディアと社会』、東京：春秋社、2015年5月

水雲堂・狐松子『京羽二重・京羽二重織留大全』、京都：光彩社、1968年9月

巽淳一郎『我念君、君念我』の組み合わせ墨書文字

<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2008/01/20080101.html>、2008年1月

渡邊晃宏「日本古代の習書木簡と下級官人の漢字教育」、高田時雄編『漢字文化三千年』、京都：臨川書店、2009年7月

山田邦和「II表現の諸相 三. 記号の役割」、平川南・沖森卓也・榮原永遠男・山中章編『文字表現の獲得』文字と古代日本 5、東京：吉川弘文館、2006年2月

(中国語)

長沙窯編輯委員会『長沙窯』、長沙：湖南美術出版社、2004年12月

長沙窯課題組『長沙窯』綜述卷、北京：紫禁城出版社、1996年10月

郭志委「試論長沙窯瓷器外銷的階段性」『南方文物』2019(6)、南昌：江西省文物考古研究所、2019年6月

李效偉『長沙窯：大唐文化輝煌之焦点』、長沙：湖南美術出版社、2003年11月

上海古籍出版社 and n. Bibliothèque『法国国家図書館藏敦煌西域文獻』18、上海：上海古籍出版社、2001年12月



中国国家図書館『国家図書館蔵敦煌遺書』27、北京：北京図書館出版社、2006年4月

中国社会科学院歴史研究所『英蔵敦煌文献：漢文佛経以外部分』5、成都：四川人民出版社、1992年9月

中国社会科学院歴史研究所『英蔵敦煌文献：漢文佛経以外部分』7、成都：四川人民出版社、1992年12月

### 【附記】

本論文は、JSPS 科学研究費補助事業若手研究 21K12940 「日本に伝存する漢字文義謎資料のデータベース化による文化史的研究」（研究代表者：呉 修テツ）の成果の一部である。